

京都大学大学院医学研究科・社会健康医学系専攻
遺伝カウンセラー・コーディネータユニット

2007 年度・1 年間の感想

所属・学年：臨床研究コーディネータコース・M1

遺伝カウンセラー・コーディネータユニットで1年間を過ごしたことで、数え切れないほどの知識を学ぶことができ、他では得られることのない経験をすることができました。臨床研究コーディネータコースの学生として、基礎的な知識からそれを生かすためのスキルや考え方に至るまで様々なことを学び、また、遺伝カウンセラーコースと一緒にいたからこそ、これまであまり接したことのなかった遺伝に関することにも触れることができました。ユニットの先生方やともに学ぶ院生と過ごしてきたことでも、得られるものは大きかったと思います。それに加えて、社会健康医学系専攻（SPH）に属しているために、疫学や医療統計をはじめとした幅広い分野のことを学べることは、今後の研究や仕事を行っていく上で、とても役に立つものだと感じています。

けれども、ユニットの内外でのギャップを感じる一年間でもありました。そもそも臨床研究コーディネータコースが、CRC（治験コーディネータ）だけを養成するコースであるというイメージが強く、これは入学前の自分も感じていましたし、同じ SPH の学生や教員であってもそう考えている人が大多数であると思います。特に、他大学や企業など外部の人に理解してもらうのに苦労している状態です。また、遺伝カウンセラーコースと併設されているために生じる誤解が多いこともあります。

次に、SPH 全体のカリキュラムの話ですが、複数の担当講座や担当コースによる講義・実習を並行して受講することがあまり考慮されていないように感じます。通常の大学院では自分の専攻する分野や研究室の講義しかとらないことが多いからかもしれませんが、各講義で提示される課題発表やレポートの時期が重複してしまうことが頻繁にありました。特に必修科目や実習の多いユニットでは、それによる負担の大きさに悩まされることも多かったです。また、一般的な大学院生が就職活動を始める1回生の10月ぐらいから2月までは、講義や課題に追われることが多く、卒業と単位取得を考えると就職活動が困難な状態です。

最初に述べたように、ユニットの一員だったからこそ得られたものは多く、それぞれの講義や実習の内容に関してはとても充実したものだと感じています。そのため、学びたいことはたくさんありますし、不十分なまま終わらせたくはありませんが、ユニットでの1年目を通して、講義と実習と研修と課題研究を2年間ですべて十分にこなすことの難しさも感じました。

1年間の感想

遺伝カウンセラー・コーディネータユニットという名前やHPの案内から、遺伝子研究などの最先端の医学研究にかかわれると思っていましたが、入学してみると少し違っていました。CRC = 治験コーディネータと一般的には理解されていて、講義でも治験や薬の話がほとんどでした。ただ、CRCのあり方会議などでは、治験だけではなく、医師主導の治験やトランスレーショナルリサーチなどもコーディネータとしてやっていけるようにならなければという発表があり、また治験コーディネータを臨床研究コーディネータと呼び方を変えたという組織などもあったので、今後は仕事のはばが広がり、認識も変わっていくのかと期待も持てました。ここの臨床研究コーディネータコースの開講の目的も治験だけでなく、臨床研究も出来るような人材の育成ということが、うたわれていたので、私はそちらの方を目指しているところです。

社会健康医学専攻(SPH)の講義では、治験も含めた臨床研究の基礎がその道のブクの先生達からみっちり勉強することが出来て、大変ためになりました。疫学というものは、こちらで初めて勉強することとなりましたが、疫学研究の重要性も認識することが出来、興味も持つことが出来ました。また、全国でここだけしかないという知的財産コースの講義も受講することが出来るのも魅力的でした。余裕あれば受講した講義がいろいろとあります。

ユニット開講の講義の中では、先端の医学研究についてはあまり触れませんでした。コースが医学研究科の中にあるため、他の生命科学や先端医学研究の成果発表も聞きに行くことも出来るところがよかったです。実際には前期・後期とも必修科目の課題が多くてなかなか聞きに行くことは出来ませんでした。ただあと1年あるので、今年はいろいろと聞きに行きたいと考えています。

ただSPHの先生の講義は、中身が濃くてとても有意義なのですが、CRCコースは必修科目が大変多く、いっぺんにたくさんの講義を受講するので、消化不良になってしまうところが残念でした。もう少し掘り下げて勉強したいものもでてくるのですが、レポートの締め切りに追われてしまい、結局広く浅くなってしまうところがもったいないと感じました。

社会健康医学専攻に所属していることで、もうひとつ有意義なことは、さまざまなバックグラウンドや年齢の人といっしょに勉強出来たということでした。グループ実習での課題は大変なのですが、その分、戦友のように仲良くなり、打ち上げと称して飲みにいったりしたことが楽しかったです。

オープンキャンパスでは社会人の人が多く来られて、興味をもってもらったのですが、実際には受験を断念している人が何人かいました。CRCコースは講義や実習が忙しく、アルバイトをする時間がありません。社会人にとって仕事を辞めて無収入になってしまうことは負担が重く、経済的に断念してしまわざるを得ないのは残念に思いました。

ユニットで1年間過ごして

臨床研究コーディネータコース M1

私は、大学で薬物治療の個別化に興味を持ち、より負担の少ない治療を多くの患者さんに提供したいと思い、臨床研究コーディネータコースに入学しました。私は大学を卒業してすぐに大学院に進学したので、最初は、社会人経験のある方たちに圧倒されるばかりでした。大学院とはこんなにもハードで厳しいところなのかと驚き、自分の考えの甘さを感じ知らされました。しかし、逃げ出したいくなりながらも1年間頑張ってきたのは、いつも支えてくれる同期や先輩、熱心に指導をして下さる先生方のおかげです。

カリキュラムはハードですが、その分得られるものは多く、とても充実した1年でした。研究のあり方や、臨床研究の計画・実施・解析・審査について、倫理的な問題の考え方、コミュニケーションなど多くのことを学ぶことができました。このような医療に関わる者として知っておくべき知識をたくさん吸収することができたことは、これから仕事をする上で非常に役に立つと思います。授業では、京大の先生だけでなく、実際に臨床研究をされている研究者や、審査をされている方、患者会の方などさまざまな立場からの意見を聞くことができ、視野が広がりました。また、社会健康医学系専攻の授業では疫学や医療統計を学び、薬剤だけでなく、疫学の臨床研究にも興味を持ちました。遺伝カウンセラーコースと同じユニットということで、遺伝子について勉強できたのもとてもよかったです。

今まで大学では、ただ座って授業を受けることがほとんどだったのに対して、臨床研究コーディネータコースでは発表など積極的に授業に参加することが求められました。大学時代とのギャップに戸惑いましたが、素晴らしい先生方や目標を持って努力されている先輩・同期から刺激を受け、自ら学ぶということが身に付いてきたように思います。学生のことを考え、熱心に指導して下さる先生方に感謝しています。

将来は、治験だけでなく、市販後の臨床試験にも関わり、よりよい治療法の確立に関わっていきたいです。倫理的で科学的な臨床研究が行われるよう研究者を支援し、また、臨床研究に参加する方の権利や安全を守ることができるよう、これからもしっかり勉強したいと思います。私は臨床経験はありませんが、経験や知識の豊富な方たちを見習いながらも、焦らず自分なりに頑張っていきたいと思います。2年目は実習がありますが、臨床経験のない私にとっては初めての臨床現場です。不安もありますが、実際の業務を体験できることをとても楽しみにしています。

1. 実習について

本コース二年目の最も大きな学習内容に「実習」があります。非医療系出身の自分にとっては、何よりも楽しみであり、何よりも多くのことを学びたいと考えていた科目でした。国立がんセンター、JCOG、静岡県立がんセンター、北里研究所、東京大学附属病院臨床試験部、IDA、そして京都大学治験管理センターと、多くの場所で、さまざまなタイプの臨床試験の現場について教えてもらい、体験させてもらうことができました。私にとっては、医療現場そのものを学ぶことと、臨床試験現場を学ぶことの大きな2つの柱を目標としていましたが、いずれも基本的なところは達成することができています。

そして何よりも得がたい経験だったのは、医療者と患者の関係を真に考えさせられたことです。「患者・被験者の利益を第一に考える」とはどういうことか、今回の実習で得られた自分なりの回答を胸に、卒業後も現場で常に問いながら実践していきたいと思っています。

2. 課題研究について

実習と同時に二年目の大きな目標は、課題研究へ取り組むことでした。1年次の後期の後半ごろから、自ら取り組みたいテーマについて考え、練りに練った上で、いよいよ着手しました。今まで講義で習ったことを実際にやってみるということが、いかに難しいかをまず経験させられ、そして、研究計画を立てるということが、いつまでたっても終わらない作業のように感じながらも、限りある時間の中で、ひとつの研究として結果を出し、考察するという一連の経験が、どれほど学習効果があるかを実感しています。将来、研究の適切な実施を支援する者として、研究そのものもつ性質や研究をする者が経験する苦難と興奮を自ら経験していることはとても重要だと思いました。人生ではじめての研究経験として、指導教官のもと、丁寧な指導を受けることができたことをうれしく思っています。

3. さいごに

実習の実現のためにきめ細かい準備をしてくださった指導教官の先生、受け入れ機関でお世話になった方々、また、課題研究の実施にあたって多方面からアドバイスやご指導をいただいた指導教官をはじめ諸先生方、そして調査に協力してくださった方々に心からお礼を申し上げます。

また、講義や実習以外の日々の生活の中での先生方や学生間のコミュニケーションからも多くのことを学ぶことができ、とても貴重な経験をすることができたと思っています。

卒業後は職場に復帰する予定ですが、ここで学んだことを随所で発揮し、先生方から教えられたものを、今度は私が現場で実践し伝える立場として、活かしていきたいと思っています。

2年間を振り返って

臨床研究コーディネータコース

2年前のちょうど今頃イントロダクトリーセミナーに参加したことを懐かしく思い出しています。言い古された表現ですが、長くもあり、みじかくもあった2年間でした。そして人生で一番内容の濃い2年間だったと思います。

何度となくくじけそうになったこともありましたが、なんとかここまで頑張れたのは同期のみんなと先生方の熱血指導の賜物です。

1年目のカリキュラムは単位数が多かったこと、研究室の建物と講義の建物が離れていて移動の時間が取られたことなどがあり、本当に大変でした。その感想が反映され2年目からのカリキュラムにゆとりができたことは考える時間を持つために良かったと思います。学生の意見を受け入れ、改善されるというのは大変良いと思います。

カリキュラムについては京都大学の社会健康医学系という環境の中で様々な講義を聴くことができること、また他の学部の講義にも参加できるというメリットもあり学ぶ意欲があればいくらでも学べるという環境は素晴らしいと思います。

ただ、私自身、1年目はカリキュラムがぎっしりだったことでとてもゆとりがなく、また2年目には課題研究のための調査に時間が必要となり講義に出る余裕がなくなったため少し心残りです。

学ぶ環境という点で、研究室が移動したことから2年目からはユニットの先生方と同じ空間となり、いつでも何でも相談できることはとても心強く思いました。

また、昼食もご一緒できることから様々な話や、時にはミニ講義、また熱い議論などに時間のたつのも忘れることも多く何よりの経験となりました。

学会参加の旅費や、備品などもふんだんに支給され恵まれた環境で学ぶことができましたが、学生の身分としては少し甘やかされたのではないかと思います。

ただこうした援助がなければ2年次の実習で遠隔地に長く宿泊するということができなかったと思い感謝しています。

実習先についても希望したことを可能な限り取り入れてもらえるという点で学生の意見を尊重していただいたと思います。

第一期生としてはこれから社会に出てここでの学びを発揮することが使命であると思います。

このユニットは5年の期限付きということから3期生で終了するのか、それとも形を変えて続くのかわかりませんが、とにかく1期生としてここで得た人のつながりと、つらかった1年目を乗り越えた思い出があればどんなつらいことも乗り越えていくことができるのではないかと思います。

遺伝カウンセラーコースで一年間学んで

2008年2月5日提出

遺伝カウンセラーコース M1

2007年4月。私たち遺伝カウンセラーコースのメンバーはお互いに顔を合わせ、これからの学びにそれぞれが思い想いの期待を胸に集まりました。すでに一年間勉強し、実習や演習の経験を積んで来られた先輩方と、私たちの学びを支え、どこまでも熱心で丁寧なご指導をくださる先生方に迎えていただき、零れおちそうなほどに咲き誇る桜の花が、私たちの思いを表しているかのように印象的で、そのエネルギーに満ちた風景は今でも鮮やかに思い浮かびます。10か月も経ったのかと思うと、あっという間に感じますが、春のころの自分と今の自分を比べると、過ぎた時間以上に中身のある日々を過ごさせてもらってきたことを感じます。

前期の授業スケジュールは見た通り時間的にも忙しく、内容的にはSPHらしく幅広さと深みがあり、それぞれの授業がどれもとても充実しておりました。もったいないほど充実した内容に、前期の途中では、消化不良のような気がして、自分が十分についていけないと感じた時期もありました。しかし、悩む暇もないくらいに怒涛のレポート課題・試験期間が訪れ、自分の考えを構築し述べたり、試験勉強に集中したりとずいぶん体系的な勉強になりました。

また、私たち遺伝カウンセラーコースの学生は様々な学会やセミナーや研修会・勉強会に積極的に参加し学ばせていただく機会に恵まれています。学外で学ぶものは、その内容だけではなく、いま現場で活躍されている方のお話を聴ける事や、一緒に学ばせてもらう中でお互いに交流していける事にとっても大きな意義を感じます。月に1,2回、多い月では毎週末とハードスケジュールに拍車をかけますが、学内での学習とは違った貴重な経験と学びになり、学内に帰っての学習にも刺激を与え、相乗効果になっていると思います。さらに、各分野のご専門の諸先生方に教わり、先輩や同期の仲間とディスカッションし合える雰囲気は、私の学ぶエネルギーになっているように感じます。

後期は、演習や実習が増え、より実践に即した日々でした。臨床遺伝学演習(ロールプレイ演習)はクライアントさんの気持ちになって考え、遺伝カウンセラーの立場を経験しました。コミュニケーション概論では、自分たちのコミュニケーションを丁寧に振り返り、そこから実践の場面につなげて考える橋渡しとなるようなとても貴重な学びでした。そして、2年目にも続く遺伝カウンセリング実習は、クライアントさんに出会い、個別性にあふれる実際の声を聴くとても貴重な場面です。今自分の目の前にいるクライアントさんは何を求めておられるかということ、心と頭の両方を使って感じ考え、一人一人に対応していくことは、豊富な実習の機会と、クライアントさんをはじめ、諸先生方のご指導、実習施設の方々のご協力あってこそ学べるものだと思います。多くの経験をさせていただきながら今、自分が主体的に学び、遺伝カウンセラーとして何ができるか、遺伝カウンセラーとは

何をするものか、日々「そもそも」のところに立ち返る機会に出逢ってばかりいる毎日です。

ここで学ぶことのできるものは全て、他では絶対に学ぶことのできない貴重な学びばかりだと感謝と感動の思いでいつも過ごしています。その気持ちがいつも自分を前向きにさせてくれていると思います。もうこのコースの半分が終わりに近づき、残り一年と少しと思うと、本当にあっという間のように感じます。これからも今までと同様、このような恵まれた環境に感謝し、ここで出会った大切な仲間と助け合って、自分のできることを一つ一つ丁寧に学ばせていただき、身につけていければいいと感じています。

この一年を振り返って

遺伝カウンセラーコース M1

この一年は私にとって、初めてのことばかりでカリキュラムについていくことで精一杯の一年間でしたが、それはまたとても充実した一年でもありました。しかしそんな状況でしたので、もうこのコースにはついていけない、やめようかな、と思うことも何度もありました。しかしそれでも一年間やってこられたのは、話を聞いてくれる先生、先輩、同期の友達がいてくれたおかげです。これらの人たちの支えなしではとてもやってこられなかったと思うので、本当に感謝しています。また同期といっても、社会健康医学の学生は、年齢もバックグラウンドも様々で、そもそもこのような人たちと一緒に授業を受けたりするという状況が私にとっては初めてのことでした。しかし、ディスカッションをしたりする際には、この違いがあるからこそ多くの視点から考えることができ、より良いものが生まれていたと思います。

カリキュラムの中身を振り返ると、前後期を通しての授業では、遺伝や病気、コミュニケーションについて本当に多くのことを学びました。しかし、後期からの病院実習に出てみると、それは学ぶべきことのほんの入り口にしかすぎなかったことを強く感じました。講義として疾患自体は学んでいたとしても、遺伝カウンセリングに来られるクライアントは当然のことながら一人一人違い、また悩んでおられることも違います。実習を通して学ぶことは、今自分の目の前にいるクライアントは何を求めているかということ。それはいくら勉強したからといって、事前にすべて準備できることではありません。そんな、一人一人に対応していく、ということを実習を通してこれからも学んでいきたいです。また多くのセミナーや学会に参加して、立場も職種も違う人たちと、ともに遺伝カウンセリングをはじめとする様々なテーマについてディスカッションできたことは、とても勉強になりました。

これからの残り一年は、実習の経験をふまえ、課題研究にも一生懸命取り組んでいきたいと思っています。遺伝カウンセリングの分野はまだ始まったばかりで、研究されていない分野や、整備していかなくてはならない制度などが多くあります。自分の課題研究がその一端でも担えたら、と思っています。

1年間を終えて

京都大学遺伝カウンセラーコース M1

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻遺伝カウンセラーコース入学からの1年を振り返って、第一の感想は、多くのことを学んだ実り多き一年だったということです。前期は講義中心、後期は実習中心でした。前期の講義では、遺伝に関する講義はもちろんのこと、社会健康医学系専攻に所属しているコースであるため、医療統計学、行動学、環境科学、医療マネジメント、疫学のコア5科目が必修でした。この他、基礎分子生物学、社会疫学、文献検索・評価法、医療統計学実習、臨床研究概論、臨床研究方法論、疫学実習、医療倫理学概論などを選択しました。

医療統計学・疫学関連や社会疫学等の講義では、研究データの基本的な見方や自分が研究する際の注意点や実践的な観点を学ぶことができました。行動学では、基本的な倫理原則や行動理論について学び、遺伝カウンセリングの実践と結びつけて考えを深めることができました。環境科学や医療マネジメントは、遺伝カウンセリングを大きな枠で捉えることに役立ちました。

遺伝関連の講義は、どれも遺伝カウンセラーとして知っておくべき基礎的・実践的知識であり、実習が始まってからも振り返り活用し、理解を深めることができました。

また、遺伝カウンセリング実習1・2の講義の一環として、各種セミナーや学会に参加させてもらったことは、非常に有意義でした。現場の研究者や実践家からの報告を聞くことで、最新の知見を得たり、現在どのようなことに関心が集まっているのか、解決すべき問題は何かといった時代のニーズを把握するができました。また、何よりもこの領域をリードする先生方や発表者と直接お話しすることができたことは大変貴重な体験であり、多くの刺激を受けることができました。来年度に学会参加する頃には、自分の課題研究のテーマが決まっていると思うので、自分の取り組むテーマを多角的にとらえ深めていけるよう、いろんな専門家の意見を聞いてみたいと思う。

そして実習は、京都大学医学部附属病院、大阪市立総合医療センター、兵庫医科大学病院の3つの施設で指導教員の遺伝カウンセリングに陪席させていただいている。京大病院では、電話受け付けから遺伝カウンセリング後のフォローアップ電話まで関わらせていただいております。クライアントがどのような気持ちで電話をかけ、受診し、その後生活されているのかといった一連のプロセスを知る貴重な体験となっている。また、大阪市立総合医療センターでは、小児神経外来でも実習をさせていただいている。小児神経外来には、遺伝カウンセリングに来られる前の段階の人や、遺伝子診断がついた後の人が受診されていることから、いろんな時期における人それぞれの日常生活上の悩みを知ることができる。遺伝カウンセリングを行うものとして、全体の中での遺伝カウンセリングの位置づけや遺伝カウンセラーの役割を見渡し、遺伝カウンセラーに何ができるのか、何が求められているのかを考え、クライアントにとって最良となる遺伝医療体制を整えていくような活動をしていきたいと考えている。

1年をふり返っての感想

遺伝カウンセラーコース M1

この1年間は時間の流れがとても早かったように思います。しかし、これだけ充実した環境で多くの良い刺激を受け、たくさんの機会にも恵まれ、自分のやりたい勉強に打ち込むことができた1年間は過去にありません。それだけ有意義な時間を過ごすことができていると思います。

4月、念願だった本学・遺伝カウンセラーコースに入学し、自分がずっとやりたかった勉強がスタートしました。それだけに、講義はどれも興味深くワクワクしながら受講していました。特にコースの専門科目はタイトなカリキュラムでしたが、講義は苦ではなく、少人数でアットホームな雰囲気で行われる授業を受けられることにとても感謝していました。テストやレポートはかなりハードでしたが、仲間とともに助け合い、先輩にも励ましていただきながら何とか乗り切ることができました。

そして後期から始まった実習は、臨床現場での大変貴重な活きた学びの場となっています。専門領域の異なる、複数の先生方の遺伝カウンセリングに陪席させていただくことで、それぞれの領域特有の問題に気づくことができ、また先生方とそれぞれのケースについてディスカッションを行うことで、より考えを深められているように思います。私は最近、遺伝カウンセリングの奥の深さを改めて実感しています。

また、後期は演習系の授業内容が多く準備も大変でした。中でもロールプレイは特に大変でしたが、実際に身をもって体験することができる分、とても勉強になりますし、模擬患者さんや先生、仲間からのアドバイスを糧にして頑張ることができたと思います。

学会やセミナー、勉強会にもたくさん参加させていただくことができ、学外の方々の取り組みについて学び、また様々な立場で働いておられる方の意見を聞くことができ、良い刺激になっています。患者会の方々のお話を聞くことができるのも、大変貴重な機会ですし感謝しています。来年度は自分の研究について充実した発表しできるよう、努力したいです。

最後になりましたが、このユニットの先生方、先輩方、仲間には、本当に良い刺激を受けることができ、また支えられ大変感謝しています。これからは課題研究にもとりくんでいくことになりましたが、精一杯頑張りたいです。

二年間を振り返って

遺伝カウンセラーコース M2

遺伝カウンセラーコースの課程を終えるにあたり、この二年間がたいへん充実した日々であったと実感している。最新の分野を多くの先生方から学ぶことができ、学会やセミナーなど貴重な場にもたくさん行かせてもらった。また、一年次後期から二年次前期の一年間にわたって行われた遺伝カウンセリング実習では、多くのケースを体験することができ、遺伝カウンセリングのスキルを学ぶ貴重な機会となった。

とくに印象に残っていることは2007年10月にアメリカで行われた米国遺伝カウンセラー学会(NSGC)へ参加したことである。アメリカの遺伝カウンセリングの考え方、最新のトピックスに触れ、世界で行われている遺伝カウンセリングの研究を間近で見ることができた。欧米諸国の遺伝カウンセリングの方針や研究スタイルを体験したことで、日本の遺伝カウンセリングの不足部分、大切にしなければならないことを改めて考えるきっかけとなった。日本の遺伝カウンセリング領域では、まだまだ研究が不足していると感じる。NSGCではさまざまな研究方法を用いて質の高い研究が実施されていた。臨床現場での遺伝カウンセリングはもちろんだが、日本においても、このように質の高い、遺伝カウンセリングの研究が必要であると思う。今後、私たちも日本の遺伝カウンセリングを発展させるために、一層努力しなければならないと気持ちを新たにしたのを覚えている。

また、二年目のこの一年間は課題研究にも力を入れて取り組んだ。実際に調査に出向き、分析を行い、その成果をまとめるという一連の流れを通じて、研究の難しさと楽しさを実感した。社会健康医学系専攻にいたからこそ、疫学や質的分析などの研究方法論や医療倫理、ゲノムや医学を学ぶことができ、それらを生かした研究を考えることができた。まだまだ不十分なことも多いが、二年間で学んだこれらの知識を大切に、今後も研究を行っていきたいと思う。

この二年間を振り返って、遺伝医学の知識、遺伝カウンセリングにおけるコミュニケーション、遺伝カウンセラーの役割、他職種との連携、研究方法論などたくさんのことを学んだ。遺伝医療、そして遺伝カウンセラーという職業の難しさと奥深さを教えてもらった。本年の秋の認定遺伝カウンセラーの試験があり、合格後には遺伝カウンセラーとして第一歩を踏み出すことになる。社会に貢献できる人材として、学ぶ機会を与えてもらったことを感謝し、一生懸命がんばりたいと思う。また、遺伝医療・遺伝カウンセリングに関わる研究にも力を入れていきたいと考えている。

1. 感想

院生生活を若干なめて入学した私は、本コースで過ごした2年間はまさに怒涛の日々で、泣きそうになったことはしばしば、いや密かに泣いていたこともありましたが、充実した2年間になりました。ユニットの先生方をはじめ、共に学んできた院生、秘書さん、SPHの先生方・院生、学会・セミナー・実習で出会った方々など、本当に多くの人に支えられて、有意義な時間を過ごせたように思います。

講義（遺伝医療、コミュニケーション、遺伝カウンセリングロールプレイ、SPH関連等）・実習・課題研究...にとっても充実した教育内容で、知識や技能はもちろん、先生方から医療者、研究者、一人の大人としてのあり方や考え方についても学ばせていただきました。

また、各種学会やセミナーに参加させていただくことで、遺伝カウンセリングをはじめ、遺伝医療の最近の動向や関連領域の研究について知ることができたとともに、他施設の先生方や院生と交流する機会が持てたのは貴重な経験となりました。特に今年はアメリカの遺伝カウンセリング学会にも行かせていただき、USAをはじめ、他国の発表や遺伝カウンセラーからも刺激を受けました。

一方で、新しいコースの一期生として入学し、手探り状態な側面もありましたし、先生方と院生間のコミュニケーション不足などから、私達もつらい思いをしたことが何度もありました。2年目には、先生方や院生の働きかけもあって、ユニットの教育としても去年の反省が少しずつ改善され、私自身もうれしく思います。

ユニットはもちろんSPH全体としても、大学院で先生方がこんなに面倒を見てくれるところはないのではないかと思います。先生方にはとても感謝しています。ありがとうございました。また、GC・CRCコースの一期生は、年齢もバックグラウンドもばらばらで、勢いがあるというか、個性派ぞろいでしたが、このメンバーにはかなり助けられました。他人を尊重できてやさしいM1の後輩たちや同室の医療倫理の先輩方、SPHの同期にも助けられ、2年間を乗り切ることができたと思います。

2. 今後に向けて

・M1後期～M2前期の合同カンファレンスでは、先生方にご指導いただきながら、院生が発表させていただきました。実習を振り返り、問題・課題をクリアにすることができ、かつそれに対して近大メンバーや様々な職種の先生方からもご意見をいただけるという良い機会でした。ただ、発症前診断や夫婦ですれ違いのあるクライアントが来談し、ケースが何回も続く困難な症例では、次の遺伝カウンセリングでの対応について、ケースに入る者だけでなく、他の先生方・院生とも相談できるようなプレカンファのようなものができる、いいのではないかと思います。（皆さんお忙しいので難しいと思いますが。）

・私自身の学習・経験不足もあり、この2年間の勉強だけで、今後仕事をしていくにはかなり不安があります。認定遺伝カウンセラーや遺伝カウンセラーコースの院生の中でも、今後ネットワークができていくとよいと思いますが、京大の遺伝カウンセラー・コーディネータユニットとしても卒業生のサポートをしていただけると幸いです。私自身も未熟者ながら、卒業生として力になれるところは、協力していきたいと思います。

この2年間を通して、遺伝カウンセラーコースの院生として非常に多くのことを学ぶことができたと感じています。講義はもちろんのこと、実習やセミナー・学会への参加、合同カンファレンス、課題研究、電話による予約受付など、大変有意義な2年間を過ごすことができました。さらに、私は1期生として入学したことから、様々な業務のマニュアルやルール策定に携わることができ、今後「遺伝カウンセラー」として新たな分野で働くにあたって、非常に貴重な経験をするのが出来たと思っています。このように、2年間という限られた時間の中で、様々な側面から「遺伝カウンセリング」を学ぶ機会を与えてくださった関係者の皆さまに感謝しています。

遺伝カウンセラーコースの専門科目の講義は、長年遺伝カウンセリングに取り組んでいる先生方から、遺伝カウンセリングを行う必要不可欠な知識や考え方を学ぶことができ、非常に充実していました。特に、少人数制であったことから先生方と院生の距離も近く、授業の中で自分の疑問点を解決することもできました。また、専門科目のみならず社会健康医学の科目を選択することもでき、これらの授業を通して公衆衛生の知識や視野を広げることができたと思っています。1年目の前期は、遺伝カウンセラーコースの専門科目と社会健康医学系専攻の科目の両立に悩まされた時期もありました。しかし、ゲノムひろばやながはまプロジェクトのお手伝いをしたり、課題研究に取り組んだりする中で、遺伝医学と公衆衛生の両方の知識・理解を得ることに意義があったのではないかと思うようになりました。ただし、2年目には授業がほとんどありません。私は、1年目に得た遺伝医学の知識量が低下していくことを自覚していたので、1年生と共に授業を受けることもありました。1年目のハードスケジュールを経験した者としては、2年目のカリキュラムは何か物足りない気がしました。実習では、実際に遺伝カウンセリングに陪席しクライアントとの関わりを経験することで、座学とは異なる角度から疾患に対する理解を深めたり、情報提供や心理支援の在り方を学んだりすることができました。学会やセミナーでは、新たな知見を得るのみならず、他の大学院の遺伝カウンセラーコースの院生・教員や、遺伝医療に携わる様々な方々と交流を深めることができました。今後、遺伝カウンセラーの社会的な認知度や重要度を高めていくためには、医師をはじめとした他の専門職の方々との連携が必要不可欠であると思うので、セミナーや学会参加を通じて多様な考え方や意見を伺うことができよかったですと思います。さらに、米国の遺伝カウンセラーの学会に参加する機会を頂き、遺伝医学に関する最先端の情報を収集できただけでなく、活躍の場に制限を設けずに常に「遺伝カウンセラー」のキャリアを切り開き、様々なフィールドで活躍する米国の遺伝カウンセラーの姿に刺激を受けました。また、国内外の学会で発表を経験することで、自分の研究に関する様々な意見を聞いたり共に議論したりする機会を得て、課題研究に対する視野を広げることができたと思います。課題研究では、遺伝カウンセリングに関連した問題意識を持つ分野について取り組むことで、未熟ながらも得意分野を開拓することができたのではないかと考えています。また、院生でありながらも、遺伝カウンセリング実習におけるクライアントからの予約対応をはじめとした様々な業務のマニュアルやルール策定に携わることができました。遺伝医学の知識は、自主的な勉強で補うこともできる一方で、こうした経験ができたのは「遺伝カウンセラー」が新たな職種であると共に私が1期生として入学したからこそだと思います。様々な議論を重ねながらゼロから基盤を整備する過程を経験したことは、今後「遺伝カウンセラー」として社会進出しキャリアを形成していく中で、必ず役立つものであると私は確信しています。

このように2年間で得てきた経験を胸に、遺伝カウンセラーの存在意義を少しでも多く見出しつづけるように努力していきたいです。

この2年間を振り返って

遺伝カウンセラーの養成課程は、各大学院によって設置されている研究科やカリキュラム内容が異なり、これによってそれぞれユニークな院生の特色を反映しているのではないかと思う。

京都大学大学院のコースは、医学研究科の社会健康医学系専攻の中に遺伝カウンセラー・コーディネータユニットとして存在しており、コースのカリキュラムや院生だけでなく他の専門職学位課程の院生と共に社会健康医学のコア科目、医療統計学や疫学、医療マネジメント、環境科学、行動学など、今後の実践や研究を行う上で必要な科目を幅広く勉強できたことに、大きな意義があったと考えている。

遺伝カウンセラーコースのカリキュラムは濃厚である上に、一年の後期からは遺伝カウンセリング実習に入るため、講義の大部分を一年の前期に重点的に受けることになり、昨年はそのアンバランスが改善されればと思っていたが、二年目にも自分が希望する講義を履修、あるいは一部に参加することができ、またユニット以外の他の分野の先生にもご協力いただけて大変ありがたかった。また二年目は課題研究活動が中心になるが、卒業後に認定試験を受けることを考えると、もちろん自己学習を行った上で、基礎人類遺伝学や臨床遺伝学などを補講する機会があればと思った。

遺伝カウンセリング実習に関しては、実習前後の教官からの指導が充実しており、遺伝カウンセリングに陪席させていただくことで、来談者への関わり方、情報提供や支援の在り方などを身近に体験し、積極的に学ぶことができた。そして、その後も合同カンファレンスの機会にケースを振り返って考察を深めることができた。今後は、遺伝カウンセリングの実習だけに限らず、主な実習施設である京大遺伝子診療部で実際に勤務しているスタッフとのミーティングや外来会議などに参加する機会が設けられると、臨床現場で医療チームが実践している様子をもっと身近に体験できるのではないかと思った。またそれぞれの院生が経験できる症例や数は限られており、また院生の間でも偏りが生じるため、貴重な実習を個人の経験にとどめず、可能であれば事例検討会として教官や院生の間で共有し、学び合う機会を是非設けていただきたい。そして個人的には、卒業するまでの遺伝カウンセリングトレーニングとして二年目にもロールプレイ演習や試行カウンセリングのようなものが継続されるとよかったと思った。

課題研究に関しては、院生の意思や興味を尊重し、また丁寧なご指導をいただけて大変感謝している。事前に教官の先生方からテーマのご紹介があったが、研究テーマや構想を練るための期間に、ユニットの教官それぞれと相談できる機会がもう少しあればよかったと感じている。また、課題研究の取り組みに際しては担当教官にご指導をいただくのが中心になるが、定期の研究発表会でユニットや医療倫理学分野の人たちから広く意見をいただく以外にも、もっと小規模でよいので他の教官や院生からも自由に意見を交換できるような機会が継続してあればよかったのではないかと思う。

課外教育活動としては、一年目から多くの学会やセミナーに参加し、学会発表を行う機会があった。最新の情報を得るとともに、遺伝医療や遺伝カウンセリングの専門家による、さまざまな問題に対する議論を間近で聞くことができ、また、このような場で、第一線でご活躍されている認定遺伝カウンセラーや臨床遺伝専門医、患者会の方々、他大学の養成課程の教官や院生と交流する機会を持てたことが貴重な経験であった。

教官や関係者の方々のご尽力により、この2年間で遺伝医学の知識やカウンセリングマインドを身につけ、また、先生や院生をはじめとする多くの人とのつながりを築けたことに心から感謝申し上げるとともに、この大きな糧をもとに、遺伝医療を担う遺伝カウンセラーとして社会貢献に努力していきたい。

遺伝カウンセラーコースで学んだ2年間を振り返って

遺伝カウンセラーコース

遺伝カウンセラーコースで学んだ2年間は、大変充実した日々であった。

教官からは、臨床遺伝学領域の知識・技術はもちろんのこと、遺伝カウンセラーに求められる論理的思考力、研ぎ澄まされた感性、深い洞察力、状況に応じた判断を行う柔軟性、倫理観、ストレスマネジメントといった、一朝一夕で備えることができない資質についても、きめの細かいご指導をいただいた。少人数のコースゆえ、1人ひとりの学生の個性が尊重され、大変恵まれた学習環境であったと思う。

また、活力と意欲に満ち溢れたコースの仲間から受ける刺激が、学習のモチベーションを高めてくれた。

さらに、学外実習、学会、セミナーなどで出会った諸先生方も、惜しみないご指導、ご助言をくださった。

2年の間に、実に多くのものを与えていただいたが、まだまだ全てを消化して実を結んだとはいえない。卒業後も研鑽を重ね、多くの方々の支えによって身につけた成果を社会に還元すべく、励んでいきたい。

濃密なカリキュラムの中でも、2回生になって課題研究に取り組んだことはよい経験であった。今日、遺伝カウンセラーはプラクティショナーでありながら、リサーチャーとしての働きも求められている。しかし、臨床の視点にたった問題意識を研究テーマに反映させ、得られた成果を臨床に還元できるように研究デザインを組むことは容易でない。少しでも視点がぶれると、研究のための研究に陥る危険性がある。臨床経験が豊富な教官の丁寧な指導のもと研究を進めたことで、プラクティショナーの視点で問題を提起し、自ら解決の道筋を探る研究スタイルの素地を養うことができた。

関心が深い領域の中からテーマを選択し、時間をかけてまとめ上げるプロセスは、困難も少なくなかったが、遺伝カウンセリングの質の向上に資する取り組みであると思うと心が躍り、とても楽しい時間であった。課題研究で取りあげたテーマは遺伝カウンセラーに望まれている研究のごく一部ではある。しかし、習得した手法は他のテーマに応用することが可能である。卒業後もクライアントのニーズに応えるような研究に携わっていきたい。